

滋賀県東近江市百濟寺地域における地酒を通じた地域活動へのアドバイス

滋賀県推薦都市農村交流アドバイザー（分野：合意形成）
藤田彩夏（合同会社グリーンラボラトリー 代表社員）

1 取組概要

紅葉の名所として知られる「釈迦山 百濟寺(ひやくさいじ)」。かつては「東洋一の寺院」「地上の天国」と称された知る人ぞ知る名刹めいさいつです。その百濟寺を核とし共に歩んできた百濟寺地域は、過疎化が進みつつあることから、有志メンバーで活性化を図るためのプロジェクトを結成しました。

それは、百濟寺が織田信長による焼き討ちに合うまで、寺内で醸造していたとされる「百濟寺樽」を復活させ、かつての賑わいを取り戻そうとするプロジェクトです。



2 取組前の地域の状況

百濟寺は檀家がないため、観光収入（入山料）で寺の景観を維持しています。

秋の観光シーズンにはたくさんのお客様が来られますが、年間の来訪者数としては年々減っていました。また、百濟寺オリジナルのお土産がなく、どこのお寺にも売っているようなお守りやお菓子しかありませんでした。

3 具体的なアドバイス内容

地域へのヒアリングや市史編纂さんなどから歴史を含めた情報を洗い出し、百濟寺にしかない歴史を探しました。その中で、室町時代の文献より寺内で清酒を醸造し、幕府に献上していたことがわかり、復活させることを提案しました。

お酒の醸造に当たっては、地域の協力が欠かせず、酒蔵はもちろん、百濟寺町の農家や地域のJAにもプロジェクトに参画してもらいました。協力者を増やすため、地域の方と何度も話し合い、行政にも関わってもらい、応援されるプロジェクトへと育てていきました。

来訪者を増やすことが目的のため、メディアにも徹底的に情報発信を行い、クラウドファンディングを活用しつつ「百濟寺」の名前を露出するようアドバイスをしました。

また、酒米の田植え、稲刈り、蔵見学などのイベントを企画し、毎年都市部の方に参加いただいています。

4 地域の変化

(伝統行事の御神酒としての活用)

百済寺樽が復活したことで、400年以上続く歴史ある伝統行事のお神酒として使われることになりました。このプロジェクトがきっかけとなり女人禁制であった伝統行事が緩和され、女性および外部の人も行事に参加できるようになりました。

(百済寺酒米生産組合の発足)

百済寺町の農地を維持するため、酒米を生産する任意団体が立ち上がりました。

プロジェクトのイベントが楽しいことを理由に、地域の若手農家(兼業農家)も参画しています。

(百済寺ブランド認証協議会の発足)

百済寺樽以外にも百済寺のお土産品をつくる目的で、協議会が発足しました。

地域の製品の洗い出し等を進めています。

5 取組の効果と地域が変化するために必要なこと

地域が変化するためには、地域のやる気が一番です。

どれくらい自分の地域が好きか、誇れるものがあるかによって活性化の加速度が変わるため、話し合いやワークショップなどを重ね、地域を見つめ直す機会をどれだけ持てるかが活性化に必要なキーポイントだと考えます。

6 アドバイザー自身のPR

自分自身が農山村集落に身を置いていることから、農山村での取組は苦労やしがらみが多いことを身にしみて感じています。アドバイザーとして地域に入る時は、現場の思いを大事にお話することと、自分ごととして地域と一緒に楽しむように心がけています。

